

外国人留学生の受入れに関する心理学的研究

八重澤美知子・桜田 千采・島 弘子
(松下)

はじめに — 問題と目的 —

1980年代後半から1990年代前半にかけて、予想を遙かに上回る外国人留学生の増加が見られた。その後、留学生数の伸びは緩やかになってはきたものの、文化的背景を異にする人々とさまざまな場面で接触する機会は確実に多くなった。金沢大学においても、1996年9月現在で、10年前の13.4倍、5年前の2.4倍の数の留学生がキャンパスで学んでいる。また、留学生センターの発足に伴い、学内措置であった留学生教育センター時代とは、異なったタイプの留学生の受入れが開始された。

これ迄、極めて等質性の高い集団のなかで生活していた留学生を受け入れる側の人々にとって、異なる習慣、言語、思考、行動をする人々との出会いは、ある種の困惑、戸惑いや疑問、さらには改めて意識することも無かった自文化へと眼を向かわせる契機となったことは言うまでもない。多くの場合、個々人は異文化接触によって生じた問題の解決の蓄積を通して異文化理解の方略を学習して行く。しかし一方で、異文化との接触場面で、経験の蓄積が必ずしも十分とは言えず、自分の対応に確信が持てない場合や留学生の言動に引きずられる場合には、異文化交流のチャンスである接触場面を回避したり、あるいは新たな悩みや葛藤を生ずることになる。

これ迄、異文化理解・カルチャーショックの研究は当然のことながら、自国以外の国々へと移動した人々の側を中心に活発に行われ成果を上げてきた。異文化適応に関する基礎的、組織的な研究はもちろん、異文化間コミュニケーション・トレーニングや異文化間ソーシャル・スキル・トレーニングなどの方法が開発され、実践されている。しかし留学生をはじめとする異なった文化を持つ人々を受け入れる側の研究には、ようやく眼が向けられ始めたところである。異文化と接触する機会の多い受け入れ側の人々は、異文化に対してどのような態度を持ち、どのような対応をしているのか、それと共にこれ迄留学生を受け入れる個々人の中に蓄積された経験を明らかにすることにより、日本人の側の異文化の受け止め方の基礎的資料を作成することを本研究の目的とする。具体的には、

1. 外国人留学生が日本で経験した不愉快な体験やカルチャーショックの内容
 2. 上記1に対する日本人の受け止め方、態度、対処法
- を明らかにすると共に自文化の特徴について考える。

I. 手続き

1. 異文化接触場面における問題 ——事例を中心にした検討——

1) 対 象

帰国直前の留学生（国立大学で7ヵ月～4年間の留学生生活を送る）を中心に11名に面接を実施した。

2) 方 法

「日本滞在中に、日本人から受けた不愉快な体験、日本人の行動で不愉快だと思ったり感じたりした体験の有無」を中心に、異文化体験を自由に日本語で話させた。事前に面接の目的を話し、理解を取った。日本語力の充分でない学生もいたが、日本語で長時間話すことに意欲を持って積極的に話してくれた。（テープレコーダーで記録）

面接時間は30分～1時間半、面接の場所は被面接者が留学生として過ごした大学構内である。原則として1対1の面接形態を取ったが、1事例のみ2名が同席したインタビューとなった。

事例については、日本語能力によって内容の詳しさにばらつきが見られたが、日本人に対する調査事例集作成のための基礎資料ということから、あまり問題にしなかった。

面接調査のインタビューは、日本語教師（非常勤）が担当した。大学の正規のスタッフではない利点を活かして留学生の本音をある程度聞くことが出来た一方で、対象者の授業を一度は担当した影響からか、大学・大学関係者に対する不満は殆ど聞くことが出来なかった。

面接は1996年6月～9月までの4ヵ月間実施した。

3) 事例紹介（概略）

<case 1>

ヨーロッパ系／男性／大学生／経済学部／滞在7ヵ月

私が困って「手伝ってください」と頼んだときは日本人は親切だ。しかし、女の人には私が怖いのか今日も「すみません、うつのみや（本屋）はどこですか」と言ったら逃げて行ってしまったけれど。

しかし、今度私が日本に来るときも保証人が必要だと言われて困った。日本人の友人も一生懸命世話をしてくれたが彼は学生だから保証人にはなれず、やっと金沢大学で先生に保証人になってもらって日本に来ることができた。が、来るのがとても遅れてしまった。日本はそういうところはとても官僚的だ。

大使館の人はいつも同じ問題で忙しいのであまり親切ではなかった。

私ははじめ大使館で文部省の留学生試験をうけた。99%合格だと言われたが、結

果は文部省に拒否された。それからもう一度留学の準備をして、今度には行けることになったのだがそこで始めて保証人が必要だということが分かったのだ。それまでそんなことは全然知らなかった。

<case 2>

アフリカ系／男性／大学院生／工学部／滞在4年

日本人は日本にだけなんでもあると思っている。「あなたの国には車ありますか」「こんなシャツありますか」「自動販売機ありますか」などとくだらないことばかり尋ねる。そして日本人は他の国のことを知らない。「あなたの国には家がありますか」ときかれたことがある。わたしは「家、ありませんよ。家族は一人に一本ずつ木があります」と言った。そう言われたら日本人も自分で考えるだろう。

信号機の色を「青」だと言う。「どうして？グリーンなのに、なぜブルーというの」聞くと「学校で教わったから」という。どうして自分で考えないんだろう。

<case 3>

アジア系／女性／大学院生／工学部／滞在4年

実験ではなく、実験の道具を作る時など、私たちだったら2日くらいですむところを、日本人は1か月ぐらいかかる。精密に細かいところまでゆるがせにしない。勿論よいことなのだけれど、実験の結果には何の関係もないところも同じようにする。そこまでする必要はないのに、そこまでするかという感じだ。

2. 予備調査

本研究で使用する調査票作成のため、前述した事例をもとに、留学生の発言内容の本質を捉えた15の事例集を作り、専門学校2年生、女子45名を対象に実施した。その際、箕浦(1990)が子供の異文化体験の研究の際に用いた方略、すなわち認知、情動(感情)、行動の3レベルに分ける評定を採用した。留学生と接触する場面では、「留学生の言ってることは理解できるけれども---」あるいは、「留学生には気の毒だけれども---」あるいは「ここは日本なんだから仕方が無い」等々、日本人の側でしばしば繰り返し発言される事実と一致するからである。

具体的には一つの事例ごとに、

「留学生の言うことを理解できる……………理解できない」(認知的側面)、

「留学生の発言(内容)に共感する……………共感しない」(感情的側面)、

「留学生の発言に登場する日本人と同じような行動をする可能性がある……………する

可能性がない」(行動的側面)の3レベルで回答を求めた。また、この3レベルでの記入に加え、15の事例全てに、「日本で生活しているあなたは、留学生からの発言や感想にどの様に答えますか？あなた自身が留学生と会話している場面を思い浮かべて、留学生に答える通り具体的に書いてください」という、自由記述の欄を設定した。

3. 本調査

1) 調査票の作成 予備調査において、事例の主旨に誤解を生じる傾向が見られるものを改定し、更に1で取り上げた事例の中から新たに付け加えて計20の事例集を作成し、予備調査と同様、3レベルでのチェックを行った。また、20の事例のうち5～6事例については自由記述の欄を設けたが、調査の対象となるグループにより、記述欄を設定する事例は異なっている。事例集、回答用紙は資料1、2の通りである。

2) 調査の実施

留学生と接触の多い、あるいは現在の接触頻度は少ないが、今後関わりを持つ可能性が高いことを期待される人々を対象とした。具体的には、大学生、留学生の指導教官、大学事務職員、ホストファミリーの経験を持つ4群の人々である。

留学生の指導教官は、比較的多くの留学生を受け入れて指導する経験を持つ理系の教官を中心に、また大学事務職員では留学生との接触が極めて多い部局の係を中心に調査を依頼した。ホストファミリーには一部郵送で回答を求めた。

調査は、1996年10月～11月に実施した。

II. 結果と考察

1. 回答者のプロフィール

国立大学学部生・大学院生242名、留学生の指導教官23名、大学事務職員34名、ホストファミリー16名の計315名から回答を得た。その内訳は、男性が66.2%、20代が65.0%、外国人との接触経験を持たない者の割合が46.6%となっており、海外留学をはじめ海外で生活した経験のある者は極僅か(それぞれ4.0%、1.6%)である。

2. 分析の方法と全体的な結果

3レベル、各20間についての平均値、標準偏差を表1に示す。それに基づき、「理解できる——理解できない」「共感できる——共感できない」「行動する可能性がある——行動する可能性がない」の3次元における組合せ(中央値2.5を基準として、2.4未満/2.5以上の2群に分ける処理)で分類した結果、回答者全体として3パターンが明らかにな

った。すなわち、<タイプ1, 以下T1>:「留学生の言うことについて、理解し、共感し、留学生が不愉快と感じる行動はしない」とする型には事例1, 事例2などの7事例が含まれる。これに対して、<タイプ2, 以下T2>:「留学生の言うことについて、理解し、共感するが、留学生が不愉快と感じる行動をする」という型は事例5, 事例8など12事例を含む。さらに、<タイプ3, 以下T3>:「留学生の言うことについて、理解も共感も出来ないし、留学生が不愉快と感じる行動をする」という型は事例11のみであった。(表2参照)

表1 20事例の平均値と標準偏差

	1 1認知 2感情 3行動			2			3			4			5		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
平均値 M	1.365	1.514	3.449	1.342	1.465	3.262	1.901	2.221	2.511	1.538	1.714	2.561	1.788	2.032	2.239
標準偏差 S.D.	0.662	0.740	0.733	0.584	0.641	0.818	0.878	0.885	0.960	0.805	0.897	0.956	0.871	0.921	0.910
	6			7			8			9			10		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	1.330	1.545	2.949	1.891	2.154	3.094	1.861	2.286	2.167	1.647	1.878	2.377	1.804	2.192	2.199
S.D.	0.597	0.742	0.972	0.904	0.957	0.969	0.919	0.976	0.949	0.808	0.938	0.956	0.858	0.919	0.975
	11			12			13			14			15		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	2.604	3.068	1.954	1.526	1.828	1.990	1.619	1.942	2.016	1.455	1.670	2.049	1.285	1.362	1.968
S.D.	1.091	0.900	0.999	0.627	0.748	0.859	0.743	0.854	0.940	0.693	0.839	0.955	0.566	0.595	0.871
	16			17			18			19			20		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
M	1.391	1.567	2.250	1.469	1.701	2.250	1.932	2.277	2.308	1.772	2.225	2.849	2.185	2.414	2.495
S.D.	0.590	0.710	0.815	0.699	0.789	0.902	0.955	1.008	0.985	0.825	0.880	1.077	1.068	1.036	0.954

表2 20事例の分類

	全 体	性 差		学生対成人	
		男性	女性	学生	成人
Type 1	1,2,3,4,6,7,19	男性	1,2,3,4,6,7,19,20	学生	1,2,3,7,20
		女性	1,2,3,4,6,7,9,19	成人	2,3,4,9,10,14,17,19
Type 2	5,8,9,10,12,13,14,15,16,17,18,20	男性	3,5,9,10,12,13,14,15,16,17,18	学生	4,5,6,8,9,10,12,13,14,15,16,17,18,19
		女性	5,8,10,12,13,14,15,16,17,18	成人	1,5,6,7,8,12,13,15,16
Type 3	11	男性	11	学生	11
		女性		成人	
Type 4		男性	8	学生	
		女性	11,20	成人	11,18,20

T1は、日本滞在中に留学生が偶然出会った不運な出来事としか言い様がなく、大多数の日本人はそんな行動をとらないと判断されるもの、言わば留学生の個人的な体験の違い（個人差）を表している。それに対して、T2においては、留学生の指摘する内容の理解や共感出来るものの、自分もそのように振る舞うということで、「文化の違い」（文化差）を反映したものと見える。またT3においては、「指摘されてはじめて、それが文化の違いであることが分かった」とされる型であり、T2以上に、深く文化に根差したものと見える。

さらに、各事例に対し3次元における基本構造を検討するために、各次元ごとに主因子解による因子分析を行った。その後共通性を1に設定してVarimax回転を行い、一つの因子のみに因子負荷量・絶対値.40以上であった事例を選択した結果以下の因子を抽出した。

認知レベルでは、第1因子として事例16・17・12・19・13に高い因子負荷量を示すも

表3 3レベルの因子分析結果

(Varimax回転後の因子負荷量)

レベル 事例	認 知		感 情		行 動	
	因子No.1	因子No.2	因子No.1	因子No.2	因子No.1	因子No.2
1	0.086057	0.163298	0.074443	-0.02899	0.006585	0.143408
2	0.195683	0.106635	0.183983	0.144012	0.140556	0.090805
3	0.142366	0.595429	0.255345	-0.07408	0.215412	0.481419
4	0.392519	0.319178	0.454262	0.147616	0.284632	0.34675
5	0.154288	0.123372	0.188836	0.427702	0.170833	0.0088
6	0.320579	0.212351	0.230126	-0.01558	0.087199	0.309213
7	0.111831	0.509413	0.13713	0.12152	0.091669	0.554646
8	0.360703	0.280633	0.299261	0.291019	0.006092	0.384115
9	0.279926	0.252	0.275101	0.257787	0.156735	0.15683
10	0.247789	0.538546	0.029307	0.021909	0.481647	0.195447
11	0.204488	0.377197	0.04624	0.181463	0.117832	0.12566
12	0.457387	0.198091	0.329568	0.267422	0.521242	0.088843
13	0.415494	0.279805	0.409223	0.142106	0.585733	0.184696
14	0.318962	0.034541	0.408304	0.347141	0.515123	0.204256
15	0.370273	0.226414	0.497536	0.054011	0.746726	-0.08274
16	0.617524	0.036529	0.400038	0.219661	0.671288	-0.09021
17	0.581016	0.224371	0.590586	0.155274	0.503892	0.38665
18	0.383345	0.125964	0.10915	0.600609	0.06159	0.043795
19	0.419123	0.353065	0.149388	0.162003	0.029942	0.406537
20	0.025439	0.095203	0.056471	0.474028	0.066264	0.006525

ので留学生が日本、日本人の中に溶け込めない内容であることから、「見えない壁」の因子と命名できる。また、第2因子は事例3・10・7を内容とする、日本人が外国人に対してしがちな行動すなわち「対外的接触様式」と言うことができる。感情レベルの第1因子は、性、人種、年齢、国籍、役割による人間関係の持ち方の違いに関するもので「日本人の持つ差別・差異化」、第2因子は公のルールに従う内容である「規範の遵守」とそれぞれ命名した。行動レベルの第1因子は「日本の大学生の行動」で大学の研究室で普通に見られる留学生との交流、会話に関するもの、また第2因子は、留学生が残念に思う、日本人の表面・外面にのみ捕われた行動を表わす「表面的な対人接触」であった。(表3参照)

3. 性差についての結果

20事例、3レベルで性差による反応の違いを見たのが表2、表4である。全体に女性の回答者が、「理解できる」「共感できる」と答える割合が高く、特に認知レベルでは20事例の全てに対して「理解できる」としている。また、現在の日本の社会における性役割規範を含む事例(8・9・19)に対して、女性よりも男性の回答者が「そうした行動はする可能性がある」としている。

表4 平均値における性差

事例 レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
認 知			> ***			> *		> **		> ***				> *				> ***		
感 情			> *					> ***	> *		> ***				> **				> ***	
行 動	> *							< **	< *	> **			> **	> *	> ***					< ***

> ; 男性の数値が大であることを示す (男性>女性)
 < ; 女性の数値が大であることを示す (男性<女性)
 * P<.05 **P<.01 ***P<.001

3レベルにおけるパターンでは、T1～T3に加えて、「留学生の言うことを、理解できるが、共感できないし、留学生が不愉快と感じる行動をとる可能性がある」とする回答<タイプ4、以下T4>が加わり、男性では事例8が、また女性では事例11・20がそれにあたる。

4. 学生と学生以外（成人）の比較についての結果

学生とその他の3グループ（指導教官・事務職員・ホストファミリー）の間の回答の差を表2, 表5に示す。行動レベルでは20事例中12事例で有意差が認められ、「留学生が不愉快と感じる行動をする可能性がない」とするのは、学生よりも成人のグループである。さらに、成人のグループでは、20事例の全てに「理解できる」と回答し、したがってT4には、事例11・18・20の3つが入れられる。

学生では、T1に5事例、T2に14事例、T3に1事例が分類されるのに対して、成人では、T1に8事例、T2に9事例、T4に3事例となっている。

表5 平均値における学生と成人の比較

事例 レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
認 知			> ***							> **		> **						< **	> *	< *	
感 情			> ***		< *					> ***	> *		> ***	< *					> *****	< *****	< *****
行 動	> ***		< ***					< **	< **	< **		< **	< **	< ***		< *	< ***		< **	> **	

> ; 学生の数値が大であることを示す (学生>成人)

< ; 成人の数値が大であることを示す (学生<成人)

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

5. 考 察

・各パターンについて

異文化接触の場面では、どこまでが偶然出会った個人に属する問題なのか、それともそうした個人を越えて、その背景となる広く文化全体の問題なのか判別しがたい。留学生が不幸にして遭遇した愉快でない出来事を巡って、それは個人の問題なのか文化の問題なのかによって、その後の対処の仕方が変わってくる。認知・感情・行動という3次元を設定し、そのパターンの組合せを検討することによって、個人に属する問題か文化に属する問題かの手がかりを得た。すなわち、T1は、明らかに個人に属する問題であり、留学生が指摘した事例は、残念としか言い様の無いものである。しかし、それ以外のT2～4はすべて文化の違いに根差したものと考えることができる。

さらに文化的影響力の大きさは、「異なった文化を持つ人々に指摘されるまで気付かないT3」、「理解は出来るが感情的にも行動的にも受入れ難いT4」、「理解も共感もできるが行動は出来ないT2」までの、T3>T4>T2の順と考えることができる。しか

表6 自由記述欄の内容

事例	記述内容
性別役割行動	<p>8) について</p> <p><男性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事帰りに飲みに行くことが一般に大多数(学生は除く)なので、ごく自然で特に男女差別だとは思わない。 <p><女性1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この件に関しては私も非常に反感を持っています。例えば職場を変わってきた人の歓迎会など、家族を含めて招待すべきです。その人だけでなく家族あつての個人です。 <p><女性2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 女性社員が上司と一緒に飲みに行く(つきあう)のが常識のようなことで、いわゆる上下(先輩後輩)関係の差が激しすぎる。でもこれが日本文化だ! 私も共感する。理解できる。自分も嫌!(慣れたけど)仕方がない。
動	<p>9) について</p> <p><男性1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前期(8)とともに、話がおおげさである。ストレス解消の一手段に過ぎないと思うのだが。 <p>(8) <男性2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 意見については同感である。ただし、仕事も重要であり、両立するように努力する。 <p>(9) 両立できないときには家庭を選択する。</p> <p><女性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 私もその意見にとっても共感を覚えます。日本の男性はもっと家庭に目を向けるべきだと思います。
家族についての考え方(18)	<p>(成人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 留学の最も重要な目的は他国で学ぶことであり、気持ちは理解できるが、最大限勉強するよう努力すべきである。厳しい意見かとは思いますが、家族と暮らすことを最重要視するのであれば留学すべきではない。あるいは家族を連れて来日すべきである。 ・ その国その国の民族性の違いを理解する必要がある(両方とも)。自分でなんとかするという考え方はどうにもならないときのことを考えると安値であると思われる。 ・ 日本人は家族より友人を大切に思う傾向がある。大事なことだが家族に対する思いやりがもう少しあってもいいと思う。
奨学金(20)	<p>(成人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 噂は責任のある信頼できる情報ではない。奨学金を提供している団体は様々で判断基準も様々である。採用されるか否かも不運がある。奨学金を受けるのは留学生の権利ではなく、提供団体の好意善意である。 ・ 制度が不完全であるのは理解できるが、その下で我々も働いており、制度改革まで我々の義務ではない。日本の金を宛にしている自分は恥ないのか。 ・ 成績がよくても面接はどうだった? 面接が大切だ!(上手な日本語もとても重要だ!) 人脈が必要かもしれない! そうしたらうまくいく?(西洋人であれば!? という話も聞いたことがある) ・ 事実関係や理由を調べることを約束するとともに、Pさんが「自分より劣る」と決めつけていることについて、事実に基づいているわけではないことを指摘する。後に、分かったことを伝え、Pさんと一緒に納得する。理由がないなら一緒に変だと考え、担当部署に文句を言う。 ・ 本人が「おかしい」と考えることは肯定も否定もできない。当人でなければ分からないことである。 ・ 奨学金制度がよくわからないがかわいそう!

し、一口に文化と言っても、さらに下位文化があり、性差や立場により変更される相対的なものと言えよう。留学生が指摘する事例に関しては、男性よりも女性が、また留学生と接触の多い部門にいる人々のグループにT3に該当する事例が認められなかった。留学生との交流が期待される学生のグループにおいて、T2やT3が多く見られ、全事例の75%を占めている点は、両者の親密化を促す意味でも、何等かの対応が必要である。

・事例について

指摘されるまで気付かない、もしくは理解は出来ても感情的に受入れ難いT3とT4に分類される事例には、「性役割行動」「自己主張」「家族についての考え方」「奨学金(金銭)」がある。分業型の日本の「性役割行動」に対する留学生からの疑問には、男性の感情レベルでの反発がみられる。また、「家族」「奨学金」について、成人ではいずれもT4であったが、学生ではそれぞれT2、T1としており、この2項目に対しては若い世代を中心に新たな態度が形成される可能性を示唆しているものと考えられる。(表6参照)

さらに、事例11について、我々の文化を考えた時、自己を主張することは多くの場合好まれる行為ではない事実と一致する。自己を主張して軋轢を生ずるよりは、むしろ自己を抑制して円滑な対人関係を築こうとする日本式なやり方と、自己を主張することからはじまる文化の違いを明確にしている。日本人どうしても、自分の考えを述べるだけで相手に対する攻撃と誤解される事実が存在する状況にあって、「自分の考えをハッキリ伝える」ことは大切なこととして教育されて来た留学生にとっては、混乱や葛藤、不安や戸惑いを生ずることになる。近年、「アサーション・トレーニング」や「ディベート」など、自分の考えを明確にすることの必要性ならびに訓練が国内で盛んに行われているが、裏を返せばそれだけ我々の文化が、自己を抑制することに極めて強い拘束力を持っているものであることが理解されよう。

本研究は、平成7年度、平成8年度文部省科学研究補助金<基盤研究(c):課題番号07610117>の援助を受けて行われた。

【参考文献】

- ・箕浦康子 1990 文化の中の子ども 東京大学出版会
- ・異文化間教育学会編集 1991 在日留学生と異文化接触 アカデミア出版
- ・菊池章夫・堀毛一也編著 1994 社会的スキルの心理学 川島書店
- ・渡辺文夫編 1995 異文化接触の心理学 川島書店
- ・異文化間教育学会編集 1996 異文化間教育学の可能性 アカデミア出版

Psychological Study on Acceptance for International Students

Michiko YAEZAWA, Chisai SAKURADA and Hiroko SHIMA

ABSTRACT The main purpose of this study was to investigate the attitude of Japanese people who had many opportunities to contact with International students at Universities or their homes. Subjects were Academic Advisers, office staff, librarians, students at Universities and members of host families. They were investigated by questionnaire on their attitude toward cultural shock that International students had experienced from unpleasant matters in Japan. The questionnaire was made based on interviews where International students talked about their student's life in Japan freely just before returning. With this questionnaire, Japanese attitudes toward foreigners' experiences was made clear on 3 levels ; cognitive, emotional and behavioral levels. The main results were as follows.

1) We could distinguish cultural problems from personal uncomfortable experiences that foreign students faced in Japan. 2) Japanese people have a tendency to feel the most difficulties accepting the assertion of foreign students at cognitive, emotional and behavioral levels.

資料1 調査事例集

次の文章は、日本で学ぶ留学生が、滞在中に日本で経験した「不愉快な」あるいは「意外な感じを受けた」できごとについて記述したものです。それぞれの内容について、皆さんはどう思われますか。自分の受け止め方として一番近いものの番号を○でかこんでください。

さらに、留学生がこのような発言や問いかけをあなたに向かってした場合、どうように答えますか。自由に書いてください。

- 1) Aさん(ヨーロッパ出身・男性)が、日本人の異性の友達と九州地方を旅行したときのことです。朝食堂でほかのグループの日本人旅行者と一緒にになりました。その人達はAさんたちのほうを見ながら小声で話していました。話の様子では、Aさんをアメリカ人、女友達をフィリピン人と思っているらしく、「あの人たちはエイズよ」と言っているのが聞こえました。その人たちは、あとでAさんが日本語が話せることや、女友達が日本人であることがわかると、自分たちの話していたことがわかってしまったのではないかとあわてていました。

外国人と一緒にいると日本人ではないとか、外国人ならエイズだろうなどと言われたことや、留学生の友人からも似たような経験をいろいろ聞いて、Aさんはどうして日本人はこのように差別的な考え方をするのだらうと思いました。

- 2) Bさん(ヨーロッパ出身・男性)は、東京で、今でも思い出すと不愉快になる経験をしました。ある夜の事です。駅に降りたら雨が降っていたので、Bさんはタクシーに乗ろうと、タクシーのりばに並んで待っていました。いよいよBさんが乗る番になったとき、向こうから来たタクシーが5メートルくらい手前で止まりました。そして運転手はなにやらBさんのほうを見ている様子でしたが、そのまま誰も乗せずにずっと走り去ってしまったのです。

雨は降っているし、うしろにはたくさん日本人がいるし、乗車拒否の理由もわからず、Bさんは本当にはらがたちました。

- 3) Cさん(香港出身・女性)は、あるパーティーで日本人に紹介されました。その人はCさんが香港から来たとわかるといきなり「あなたは英語ができますか」と聞きました。Cさんが「できる」と答えると、「じゃ、教えて下さい」と言いました。Cさんはそれを聞いて、まるで試験をされているみたいでとても嫌な気分になりました。

Cさんには、この人が純粋に友好を求めてきたというより、外国人と友達になれば英語を教えてもらえるメリットがあると思って近づいてきたような感じがしたからです。Cさんにとっては、友達になりたいという気持ちが大事なことで、友達になるためには英語が話せるかどうかはどうでもよいことだと思われたのです。

- 4) また、Cさんは、パーティーなどで、西洋人とアジア人がいると、日本人の多くは西洋人とばかり話しアジア人とはほとんど話さないことに気がつきました。日本人

がみんなそうだというわけではないのですが、同じアジア人としてCさんはあまりいい気持ちはしませんでした。日本人は西洋人に本当にヨワイと思いました。

- 5) Dさん(ヨーロッパ出身・男性)は、日本人は親切なのかどうか、ときどきわからなくなります。道を聞いた時も親切に教えてくれるし、店の人も親切です。市役所の人もとても親切だったので驚いたくらいです。Dさんの国では、市役所に行ってもDさんがここには邪魔なのかと思うくらい不親切だからです。しかし、これが、公の規則や法律になると驚くほど官僚的というか、融通がきかなくなります。役所などでも、理由も説明もなしに、申請したことについて許可しないといわれることもあります。事情を考慮するという柔軟性がみられません。Dさんには、文句も言わず黙って言われた通りにしている日本人が不思議に思われます。
- 6) Eさん(アジア出身・男性)は初めてホームステイをして、珍しいことや楽しいことをいろいろ体験して、よい経験だったと思っています。ただ、困ったこともありました。一つは温泉に連れて行かれ、一緒に入ろうと言われたことです。Eさんの国では入浴の習慣もありませんし、まして、他人と一緒に裸になって風呂に入るといった習慣はありません。始めは抵抗のあったEさんですが、長い滞日生活でだんだん慣れて来ました。しかし、Eさんには、宗教上のタブーで口にすることのできない食べ物があります。そのような食べ物を、親切から「まあ、食べてごらんさい」「少しなら大丈夫でしょう」と無理にすすめられるのは困りました。Eさんにとって宗教上のタブーは絶対破ってはならないものだからです。
- 7) Fさん(ヨーロッパ出身・男性)は、日本人があまり道徳的ではないことに驚きました。時々片町の飲み屋に行くのですが、そこでのサラリーマンやOLの会話には仰天させられます。まるで、テレビドラマの中の会話のように、不倫や満員の乗り物での痴漢行為の話が交わされています。Fさんの友人(ヨーロッパ出身・男性)が、大学構内のバス停でバスを待っていると、知らない女子学生らしい人に「今晚食事につきあってください」と誘われて驚いたという話もあります。(彼は興味を持ってついて行き、一緒に食事をしました)。特に、痴漢行為はFさんの国では破廉恥な犯罪です。皆の話しているのを聞くと、日本では痴漢行為は犯罪ではないのかと錯覚を覚えるほどです。
- 8) また、Fさんは、片町で飲んでいるサラリーマンは家庭があり、OLは独身が多いということに気づきました。日本では、結婚した女性は、夜は家庭で子供たちと一家の主人の帰りを待っているのが、一般的のようです。これを見ても日本では男女平等ではないと思いました。
- 9) また、Fさんは、父親がこのように家を空けている時間が多い家庭というのは子供にとって不幸なことだと思いました。子供は、モデルにすべき大人の男性が身の回りにいないことにより、大人の男性として、身につけていなければならない態度やふるまい、考え方などを学ぶチャンスを与えられないまま大人になってしまいます。これも大きな社会問題だと思いました。

- 10) Gさん（アジア出身・女性）は、日本人の女子学生と友達になりました。彼女はGさんの国に行きたいと言いました。自分の国に興味を持ってくれたと、Gさんは感激して、いろいろ話したのですが、そのうちおかしなことに気がつきました。その人はGさんの国についても何も知らないのです。Gさんの国は複雑な人種構成なので、特殊な人種政策をとっていることで有名なのですが、そのことについて何も知らないということは理解できませんでした。
- 11) Hさん（ヨーロッパ出身・男性）は、始めて日本の農家にホームステイをしましたが、そこで思わぬ事故を起こしてしまいました。Hさんが電動式の草刈り機で刈っている時に、ホームステイ先の方がHさんに後ろから声をかけました。声をかけられたHさんは、持っている草刈り機ごと後ろを振り返り、その拍子に草刈り機で相手の脛に傷をつけてしまいました。すぐ病院に運ばれ、8針縫う大怪我だったそうです。Hさんは、何回も「すみません。ごめんなさい」と謝りました。もちろん相手は「そんなに謝らなくてもいいよ」と言ってくれましたが、相手の人は自分よりずっと経験があるのだから、声をかけるときにもっと注意すべきではなかったかという思いを禁じ得ませんでした。
- 12) Iさん（ヨーロッパ出身・男性）は、日本の大学に来たら早速自分の母語を専攻している学生のいる研究室に出掛けていきました。友達がほしかったからです。Iさんはこちらから積極的に、語学的に難しいところは説明したりして、友達を作る努力をしました。しかし、Iさんがいくら「電話をかけてください」といっても、「遊びに来てください」といっても、「うん、うん」と生返事をするだけで、相手はこちらの呼び掛けに応じようともしませんでした。もしかしたら恥ずかしかったのかもしれないとも思いました。たしかにその場では楽しかったのですが、そこから踏み込んで喫茶店に行き、議論を戦わすといったつきあいには発展しないのです。そのうちIさんもつまらなくなって誘うのをやめてしまいました。
- 13) Jさん（ヨーロッパ出身・男性）は、自国の大学を卒業してから、日本の大学院で勉強しています。最近Jさんは自分がなんだかとても年をとってような気がしてなりません。日本人学生と話をしてもちっとも話が合わないのです。日本人学生の話題が子供っぽく感じられて、心から楽しむことができません。日本人は年齢を大事に考えるから、Jさんを年上と考えて遠慮した言い方になっているのかとも思うのですが、スポーツや芸能人の話、車やパソコンのような電化製品の話ばかりでなく、社会全体についての話がしたいのですが、そういう話題にはあまり食い付いてきません。もっと深いところでのお互いの理解とでもいったものを望んでいるのですが。
- 14) Kさん（南米出身・女性）は、日本の大学に来て、日本の学生は、先生の言うことにいつも「はい、はい、はい」としか言わないのが不思議です。Kさんの国では先生の言ったことでもおかしければ学生はすぐそのことを指摘します。日本に来る前に、日系人の年寄りに、日本ではどんな先生でも先生であれば尊敬されると聞いて

きましたが、Kさんの国では尊敬される先生はそれだけの理由があって尊敬されるので、先生だからという理由だけでは尊敬されません。

- 15) また、Kさんは、日本人学生のKさんの国に対する知識の貧弱なのにも驚きました。ジャングルがあって、そこには土着民がいてといった話題しか拳がらずがっかりしました。Kさんの国にも、もちろん近代的な高層ビルの建ち並ぶ都会もあります。しかし話の中にはそういうことは出てきません。学校でもきっと教わらなかったんだろうと考えました。しかしKさんは、日本人の学生と同じことが自分たちにも言えるのではないかと考えました。自分たちもアフリカ大陸に似たような思い込みがあると。そこでKさんは、日本人学生が知らないことを責めるだけでなく、自分たちの国について知らせていかなければならないと思い初めています。
- 16) Lさん(ヨーロッパ出身・男性)は、日本に来て、日本人と友達になりたいという気持ちを満足することができず、寂しい気持ちのまま、もう国に帰らなければなりません。結局日本人の家庭を訪問したのも、ホームステイした農家が一軒だけ、友達を作ったと思ってもいつも最初だけのつきあいで終わってしまう感じで、絶えず友達を作る努力をし続けていたような気がして、最後には少し疲れました。Lさんは、日本人は自分たちを中に迎え入れてくれなかったと思いました。今回の留学では、日本人の生活を外から見ているだけだったので、もう一度日本に来て日本人についてもっと深く知りたいと思っています。
- 17) Mさん(北米出身・女性)は、金髪に青い目、白い肌の、日本人が考える典型的な西洋人です。その上日本人好みの小柄で、「郷に入っては郷に従え」とばかり、誰にでも会えばにこにこ、自分のまわりの人にはあいそよく振舞いました。それが日本で生活する上では、大切なことと教わったからです。しかし、このような態度をとったことが果たしてよかったのかどうか、時々わからなくなります。
- Mさんは、日本文化を研究するために日本に来たのですが、日本人との会話は「どこから来ましたか」「日本語が上手ですね」そして「きれい」「かわいい」で終わります。Mさんは自分の研究していることについていろいろ話してもらいたいのですが特に男の人たちはまったくといっていいほど興味を示さず、Mさんが「かわいい」ことばかり話題にしたがるので、Mさんはうんざりしています。
- 18) Nさん(アラブ諸国出身・男性)は、日本に来て初めての夏休みを前に国に帰ることにしました。まだ夏休みの前で、受けなければならない授業や講義がたくさん残っていましたが、ややホームシック気味になっていたNさんは、とにかく早く帰りたいのでした。ところが、そのことを指導教官に言いに行くと、「まだ夏休みにならないのに、なぜ帰るのですか」と聞かれました。まだ日本語が上手ではなかったNさんが「お母さん、お父さんに会いたいよ」と答えると、先生は驚いたようで「Nさん、あなたは何才ですか」と聞き、Nさんが「26才」と答えると、「立派なひげも生やした大人でしょう。もう少し我慢できないのですか」と言いました(Nさんは、自国の習慣で、一人前の男性である印に大変立派なひげを生やしてしまし

た)。

しかし、Nさんの考えは違います。Nさんの国では、家族は何より、自分より大切なものです。Nさんが家族に会いたいと思う以上に、両親はNさんのことを心配し会いたいと思っています。そんな両親の気持ちを考えたら、少しぐらい授業にでなくても、あとで自分でなんとかすればいいことなので、一刻も早く両親に顔を見せてやりたいし、自分も両親に会いたいと、思ったのです。

- 19) Oさん（アジア出身・女性）は、来たばかりの頃は、賄い付きの下宿に住んでいました。そこで、Oさんは信じられない光景に出会ったのです。そこにはいろいろな下宿人がいましたが、中に30才位の日本人の男性がいました。その人は、夏になると、パンツ一つの裸で廊下を歩いたり、食堂で食事をしたりしています。Oさんの国では儒教精神がまだ生きていて、異性の前に出るときは、服装を整えるのは勿論、靴下もはかなければ叱られました。びっくりしたOさんはそのことを、電話で国のお母さんに訴えたとお母さんは「そんな下宿はすぐ変わったほうがいいよ」と言いました。

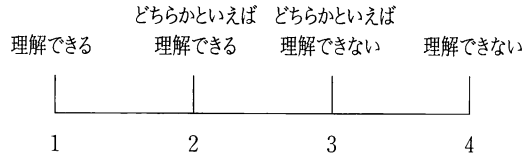
Oさんは、日本人はお風呂に入るときはしっかりと体を覆うのに、ふだんの生活では非常に開放的なので、なんだか奇妙な感じがしています。

- 20) Pさん（アジア出身・男性）は、日本に来る前、奨学金は成績がよければ誰でも貰えると、うわさで聞いて来ました。ですからPさんも奨学金をあてにして日本に来ました。日本来て、何度か奨学金の申請をしましたが、一度も貰ったことがありません。ところが、Pさんよりも成績の悪そうな（と、Pさんが思っている）留学生たちが奨学生になっているのに気がつきました。日本の奨学生の制度はどうなっているのか、担当教官や指導教官に何回説明を聞いても納得できません。Pさんは次第に腹が立ってきました。他の日本人にそのことを話しても、ただPさんの話を聞くか、「頑張って勉強して下さいね」と言うばかりです。Pさんは自分に奨学金を支給しない日本の制度は「おかしい！」と考えるようになりました。

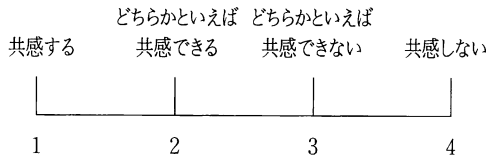
資料2 回答用紙

①

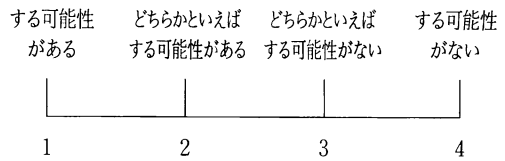
① 留学生の言うことを



② 留学生の発言（内容）に

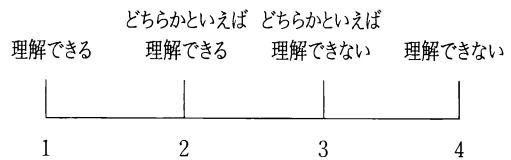


③ 留学生の発言に登場する日本人と同じ様な行動を

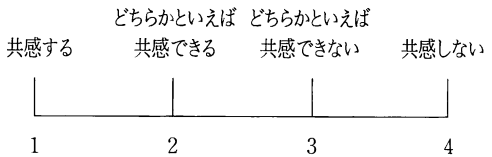


②

① 留学生言うことを



② 留学生の発言（内容）に



③ 留学生の発言に登場する日本人と同じ様な行動を

